

出版甲子園

本屋で見つける、あなたの名前。

出版というと、経験豊富な一部の人々にしかチャンスのないもののように、多くの人は思うことだろう。しかし、大学生である我々だからこそ語ることで、自分だけが知っている特別な法則「誰も知らない特別な経験」といったものも、中にはきつとあるはずである。「出版甲子園」では、そういった学生たちの中に眠る可能性を引きだし、それを本という形で出版することを目的としている。

この企画は早稲田大学のサークル活動から始まったものである。当初から、早稲田大学には自分たちが書いた原稿で商業出版を目指す「PICASSO」という団体がある。そのメンバーが自分たちの出版に関する経験を他の人々にも知ってもらいたいと、全国の学生から企画を募集する「出版甲子園」という団体を立ち上げたのである。現在は早稲田大学のみならず、東京大学や

慶應大学といった他大学から実行委員として参加している学生もいる。毎年、1000〜2000の企画の応募があり、その規模の大きさと関心の高さがわかる。一方で昨今は本を読む習慣がないという学生も増えている傾向にあるため、あらゆる学生に対し読書の推進を図っていきたいという。

企画の応募に際しては実行委員会のホームページにアクセスし、氏名など必要事項を入力する。応募条件は「学生であること」の1点のみであり、学年や年齢は不問である。そのため、まれに高校生からの応募もあるという。この時点で本に関するこの企画は、ジャンル、企画内容、自己アピール、読者ターゲットなど漠然とした内容だけが必須事項となっており、構成案や見本原稿といったものがなくても気軽に応募できる。ジャンルについては「学習参考書」「実用書

「サブカルチャー」「エッセイ」「その他」から選ぶが、小説の応募は受け付けていない。応募された企画はその後1次審査にかけてられる。本段階では委員の学生が「企画の独自性」「テーマに関する経歴や熱意」「ネタの量と質」などの観点から評価をくだし、その中で上位の企画が2次審査に進む。2次審査に進んだ企画の応募者には実行委員から企画へのアドバイスが届き、構成や章立てといった企画のさらなる具体化を進める。こうして集められた企画は2次審査にかけられ、上位20企画に絞られる。3次審査まで勝ち進んだ企画には実行委員が専属でサポートにつき、応募者は彼らの意見を参考にしつつ内容をつめていく。3次審査では、実行委員ではなく、プロの編集者が審査員として、企画を厳選する。こうして審査を通過した上位10企画は、いよいよ決勝の舞台へと進む。決勝大会では5分程度のプレゼンを通して、企画に込めた思いをアピールする。それに対し、審査員を務める編集者や書店員、さらには一般の来場者が投票し、グランプリと準グランプリを決定する。

しかし、グランプリを獲得した企画だけが出版されるわけではない。3次審査で編集者の目にとまった企画は、書籍化のオファーをもらうことができる。出版への道が開ける。そのため、毎年2、3冊程度の企画がオファーをもらい晴れて全国の書店に並び、書籍化に至るまでの長い過程の中では、筆者の「書きたいこと」と出版社や読者の考える「読



▲今年の出版甲子園のパンフレット

Q. 東京学生映画祭企画委員会とはどのような規模なのでしょうか。

A. 東京学生映画祭企画委員会は、東京理科大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、横浜国立大学、明治大学、法政大学、中央大学、立教大学、清泉女子大学、共立女子大学、日本女子大学、東京女子大学、東京理科大学の12校からなる学生団体です。毎年5月に開催される映画祭は、各校の学生が制作した映画を上映し、観客の投票によってグランプリや最優秀賞などの賞状を授与します。また、映画祭の収益の一部は、各校の学生活動に充てられます。

Q. 東京学生映画祭には賞がありますか。

A. グランプリと準グランプリ、観客賞が作品に与えられる賞としてあります。賞金と賞状もあり、賞状には映画の制作に携わった人々の名前が記されています。賞を取った作品は都内の劇場でグランプリ上映会を行い、さらに多くの人に観てもらえる機会が増えます。

Q. 東京学生映画祭にはどのような部門があるのでしょうか。

A. 実写部門とアニメーション部門があります。アニメーション部門は3年前から実施しており、TVで見られるような長編のアニメではなく、10分程度の短編アニメーションの募集が多いです。話の面白さより絵の動きや芸術性に重点を置いて審査しています。実写部門は映画祭発足当時からあり、プロの方と比べても遜色のない映画が毎年映画祭で上映されます。

Q. 東京学生映画祭企画委員会の一年間の流れを教えてください。

A. まず、作品を集めることから始まります。毎年5月後半に映画祭があるので、その前の年の10月から募集をかけます。そこでおよそ150作品ほど集まり、その作品を全て映画祭で上映する訳にもいかないので、予選会を実施します。予選会は1次から3次まであり、1次予選は委員会側で審査します。委員会側は映画の製作に詳しい人があまりいないので、2次予選は出品してくださった学生の方々に、作り手側の目線から審査してもらいます。最終的に3次予選では、もう一度委員会側が20作品程度に絞られた作品を8作品に絞ります。その8作品が本選で映画祭当日に上映されます。本選ではゲスト審査員を迎えて受賞作品を決めてもらいます。ゲスト審査員には、監督やプロデューサーの方、年によつては俳優の方に来ていただいて審査してもらいます。去年は『踊る大捜査線』シリーズの脚本の君塚良一監督でした。



▲昨年のコンペティションの様子

東京学生映画祭

5月中旬、毎年東京で学生が企画運営する学生による学生のための映画祭が行われています。その映画祭は東京学生映画祭といい、東京近郊の大学に所属する映像制作団体から作品を募集し、グランプリ作品を決定・表彰する、関東では最大規模の学生映画祭である。過去に出品した映像製作団体の監督には、現在映画界で活躍している監督もいるそうだ。この映画祭の大きな特徴は企画運営を学生のみで行っていることだろう。様々な大学の有志から構成される東京学生映画祭企画委員会の主な活動場所は、たくさんのお店が立ち並び活気溢れる若者の町、下北沢。そんな町の一角で映画や映画祭当日の予行演習等を行っている東京学生映画祭企画委員会の方にお話を伺った。

Q. なぜ東京学生映画祭を開催することになったのですか。

A. 当初は映画を作っても公開する場は多くありませんでした。しかし、もつと色んな人に観てもらいたいという思いで26年前に早稲田大学から映画祭が始まったのです。

Q. 東京学生映画祭企画委員会にはどのような部署があるのでしょうか。

A. 企画委員会は進行部、宣伝部、上映部の3つに分かれています。進行部は映画祭の様々な企画を基本に、全体をまとめる映画祭の核となっています。宣伝部はマスコミとの交渉やパンフレットやフライヤー、機関紙の発行等、映画祭の宣伝に関わる仕事を行っています。他にも、参加団体への取材、HPの作成、メール対応など、外部や参加団体、観客とのパイプ役を果たしています。最後に、上映部は映画祭当日の上映、作品管理をしており、予選スケジュールやオープニング映像を担当しています。

Q. 東京学生映画祭には賞がありますか。

A. グランプリと準グランプリ、観客賞が作品に与えられる賞としてあります。賞金と賞状もあり、賞状には映画の制作に携わった人々の名前が記されています。賞を取った作品は都内の劇場でグランプリ上映会を行い、さらに多くの人に観てもらえる機会が増えます。

Q. 東京学生映画祭にはどのような部門があるのでしょうか。

A. 実写部門とアニメーション部門があります。アニメーション部門は3年前から実施しており、TVで見られるような長編のアニメではなく、10分程度の短編アニメーションの募集が多いです。話の面白さより絵の動きや芸術性に重点を置いて審査しています。実写部門は映画祭発足当時からあり、プロの方と比べても遜色のない映画が毎年映画祭で上映されます。

Q. 東京学生映画祭企画委員会の一年間の流れを教えてください。

A. まず、作品を集めることから始まります。毎年5月後半に映画祭があるので、その前の年の10月から募集をかけます。そこでおよそ150作品ほど集まり、その作品を全て映画祭で上映する訳にもいかないので、予選会を実施します。予選会は1次から3次まであり、1次予選は委員会側で審査します。委員会側は映画の製作に詳しい人があまりいないので、2次予選は出品してくださった学生の方々に、作り手側の目線から審査してもらいます。最終的に3次予選では、もう一度委員会側が20作品程度に絞られた作品を8作品に絞ります。その8作品が本選で映画祭当日に上映されます。本選ではゲスト審査員を迎えて受賞作品を決めてもらいます。ゲスト審査員には、監督やプロデューサーの方、年によつては俳優の方に来ていただいて審査してもらいます。去年は『踊る大捜査線』シリーズの脚本の君塚良一監督でした。

Q. 送られてくる映画のジャンルにはどのようなものがありますか。

A. 様々ですが、やはり学生ならではの人間ドラマや若者から見た社会といった、学生目線の作品が多いかもしれませんね。

Q. 東京学生映画祭は学生にとってどのようなものですか。

A. 東京学生映画祭のグランプリ作品は日本学生映画祭で上映されます。日本学生映画祭というのは、TOHOSHINKAが運営している学生映画祭と京都で行われる京都国際学生映画祭のそれぞれのグランプリ作品が、一挙に上映される一番大きな学生映画祭です。日本学生映画祭や先ほど話した都内の他の劇場で上映されることにより、監督の名前が話題になって一般の映画祭に出品が決まることがあります。つまり、東京学生映画祭が日本の映画界で活躍するひとつのきっかけとなっているのです。

Q. 過去の応募者にはどういった方がいるのですか。

A. 応募してくれた方の中には「ゴールデンランバー」等で知られる中村義洋監督や「EUREKA」等で知られる青山真治監督ら、多くの日本映画界の巨匠がいますね。

Q. 最後に新聞を読んだ人に伝えたいことはありますか。

A. 今では昔ほど機材が高くないので映画を作るのも比較的気軽に出来るようになりました。誰でも簡単に映画を撮ることが出来る時代です。少しでも興味がある人や、映画が好きで作りたいたいと思っている人は積極的に一度作ってみてください。また、学生映画はクオリティが低いと思われがちですが、実際に観てみたらプロの方と比べても遜色がないので、映画祭に足を運んでみて欲しいです。企画委員も募集しているので、興味がありましたらホームページをご覧ください。